

公開研究会 WEB開催



令和5年 2月23日(木・祝)

プログラム

■ 1. 研究発表 香川大学教育学部附属特別支援学校 (9:30-10:30)

研究課題: 卒業後の豊かな生活を支える姿勢、身体の動きの改善

～ 小・中・高をつなぐ学習内容の充実をめざして～

- ・ 研究の概要
- ・ 小学部・中学部・高等部の研究発表

■ 2. 話題提供 (10:45-12:25)

(1) 「感覚特性における保護者と教員の連携」

西田智子先生(香川大学教授)

(2) 「学校体育場面における不器用さのある子どもの心の声」

澤江幸則先生(筑波大学准教授)

(3) 「姿勢・運動に関する自立活動の指導について」

松原 豊先生(元筑波大学教授)

(4) 「脳科学からDCDの子どもの困難さを理解し支援する」

中井昭夫先生(武庫川女子大学教授)

■ 3. 総合討論 (12:25-13:00)

『講演』《オンデマンド配信 - 60分 -》

(配信期間) 2月15日(水)～28日(火)

「不器用な子どもへの感覚統合理論の活かし方

(日常生活と活動の工夫)

森川芳彦先生 (川崎リハビリテーション学院准教授)



申込み方法

下記URLもしくはQRコードよりお申込みください
申込確認後、ご連絡致します。

締め切り: 令和5年 2月22日(水) 17:00

URL: <https://forms.office.com/r/808ijNHmUK>

プログラム

■ 1. 研究発表 香川大学教育学部附属特別支援学校 (9:30-10:30)

卒業後の豊かな生活を支える姿勢、身体の動きの改善

～ 小・中・高をつなぐ学習内容の充実をめざして ～

■ 2. 話題提供 概要

(10:45-12:25)

(1) 「感覚特性における保護者と教員の連携」

西田智子先生(香川大学教授)

今年度子どもの姿勢、身体の動きにおいて改善のための研究を行ってきましたが、その効果は学校だけでなく家庭での様子からも評価する必要があります。普段の子どもに関することで学校では見られない、あるいは教員が気づかないことで家では保護者が気になることがあると考えられます。今回は昨年度の研究において保護者と担任の日本版感覚プロフィール短縮版(SSP)を用いた感覚評価の比較を行いましたので、その結果を報告させていただきます。子どもの学校での様子を観察するとともに家庭での状況もよく聞き、教員と保護者が共に考え対応を考えていく必要があると思われました。

(2) 「学校体育場面における不器用さのある子どもの心の声」

澤江幸則先生(筑波大学准教授)

卒業後の子どもが豊かに生活を送るためには、卒後も生活のなかに運動やスポーツを身近に感じることであり、日常的に体を動かすことに抵抗感をもたず、また誰かに運動やスポーツを誘われたときに断らない程度に親しみをもつことである。しかしその一方で、身体能力や体力を高めることこそが人生を豊かにするという考えに固執するあまり、学校教育期に、運動の不器用さを改善することが難しい子どもたちの意欲を無視した体育活動が、未だ行われている。そうした子どもたちの声を紹介するとともに、支援のあり方について議論ができればと考えている。

(3) 「姿勢・運動に関する自立活動の指導について」

松原 豊先生(元筑波大学教授)

自立活動は、「自立し社会参加する資質を養う」ために、「障害に基づく学習及び生活上の困難を主体的に改善・克服しようとする教育活動」であり、特別支援教育の中核となる領域です。自立活動の区分の中で「身体の動き」は、日常生活に必要な動作の基本となる姿勢保持や上肢・下肢の運動の改善及び習得などの基本的技能に関することを内容としています。障害のある児童生徒には、安定して姿勢保持ができない、ボディイメージをしっかりとめてない、動きがぎこちない、協調運動が苦手、タイミングよく動けない、微細な動きが苦手だったりするなどの様子がみられる場合があります。そのような困難を改善・克服するために「自立活動の指導」では、体育授業や体育行事と密接な関連を保ち、個々の児童又は生徒の障害の状態や発達段階等を的確に把握して、適切な指導計画の下に行うことが大切です。

(4) 「脳科学からDCDの子どもの困難さを理解し支援する」

中井昭夫先生(武庫川女子大学教授)

DCDは1980年代から定義され、子どもの約5~6%に存在するという、決して目新しくもなく、珍しくもない神経発達障害の一つであるにも関わらず、日本ではその認知が非常に低い。結果、運動音痴、怠け・やる気の問題、努力・練習不足などと誤解され、嘲笑、いじめ、叱責や不合理な反復練習などにより、自尊心の低下、怠学や不登校などの二次障害につながっているのが現状である。

国際推奨(2019)では「DCDは運動制御・運動学習を担う脳のシステムの発達の問題」とされ脳機能イメージング研究が進んでいる。DCDでは、観察学習を支えるミラーニューロンシステムや内部モデルを介した感覚・運動ネットワークの発達の遅れや機能不全により運動学習困難が生じやすい。さらに、運動の成功体験(達成感)や他者からほめられるという経験(社会的報酬)が減少してしまい、ドーパミンにより賦活化される強化学習(報酬学習)の機能低下が生じるという悪循環に陥りやすい。これらを理解し、サポートするような教育が必要であるが、これらにより、脳神経ネットワークの変化や再構築が起こることも分かってきた。

JST/RISTEX「脳科学と社会」では、学習とは「脳が環境からの外部刺激に適応し、自ら情報処理神経回路網を構築する過程」、教育とは「環境からの刺激を制御・補完して学習を導き鼓舞する過程」と定義しているが、DCDの子どもたちの困難に対し、脳科学的な理解に基づいた教育(Brain-based education)と支援が求められる。

《オンデマンド配信》(配信期間)

2月15日(水)~28日(火)

【講演】「不器用な子どもへの感覚統合理論の活かし方 (日常生活と活動の工夫)」

森川芳彦先生(川崎リハビリテーション学院准教授)

発達性協調運動症(DCD)の子どもは、身体を協調して使うことに困難さがみられます。自閉スペクトラム症(ASD)、注意欠如多動症(ADHD)、限局性学習症(LD)などの発達障がいの中にも、運動の苦手な子どもがいます。そのような子どもは、環境や自分の身体から受け取った感覚情報を脳で上手く処理することがとても難しいです。そのため、子どもは身体の使い方がぎこちなく、不器用であり、運動することを嫌がったり、運動に対して自信を失っていることがあります。感覚統合理論は、1970年代、アメリカのカリフォルニアのJ. Ayers博士が学習障がいの子どもの対象に治療理論として構築したものです。日本においては、早くから病院などで取り入れられ、不器用さをもつ発達障がいの子どものに適応されています。この理論は、子どもの日常生活での困難さについて脳機能の視点から解釈して、支援につなげるものです。今回の講演では、子どもの困りごとを感覚統合理論の視点から捉え、日常生活や活動の工夫について具体的な例を交えながらお話ししたいと思います。

プロフィール

■ 講師紹介

(1) 西田智子先生(香川大学教授)

香川大学教育学部教授(特別支援教育)／香川大学医学部附属病院小児科診療協力医師
香川大学教育学部附属特別支援学校学校医

【資格等】

小児科専門医 小児神経専門医

(2) 澤江幸則先生(筑波大学准教授)

博士(教育学)、臨床発達心理士、社会教育士。

一般社団法人ULURA(うるら)代表理事／地域コーディネーター。現在、日本DCD学会や日本アダプテッド体育スポーツ学会等で理事を歴任し、スポーツ庁の障害者スポーツ推進プロジェクトの有識者や障害の有無にかかわらず共に学ぶ体育授業推進会議協力者、スポーツ庁審議会臨時委員を担っている。加えてDCD関連の書物を多数編集・執筆している。

(3) 松原 豊先生(元筑波大学教授)

筑波大学附属桐が丘特別支援学校教諭、筑波大学特別支援教育研究センター教諭、こども教育宝仙大学教授を経て2017年より筑波大学体育系教授として勤務。2022年筑波大学を退職。現在は、こども家族早期発達支援学会副会長、日本ダンス・セラピー協会理事、こども教育宝仙大学、国立障害者リハビリテーションセンター学院非常勤講師などを務めている。主な著書に『発達が気になる子の運動遊び88』(2014学研出版)『DVD障がいのある子どもの運動遊び;全2巻』(2010 新宿スタジオ)『発達性協調運動障害[DCD]』(分担)(2019金子書房)他。

(4) 中井昭夫先生(武庫川女子大学教授)

医学博士、小児科専門医・指導医、子どものこころ専門医・指導医、公認心理師、臨床発達心理士。1986年福井医科大学(現福井大学医学部)卒業、1991年同大学院博士課程修了。福井医科大学小児科助教、McGill大学モントリオール神経研究所Brain Imaging Centreリサーチスタッフ、福井県こども療育センター主任医長、福井大学「子どものこころの発達研究センター」／医学部附属病院「子どものこころ診療部」／連合小児発達学研究所「こころの形成発達科学講座」特命准教授、兵庫県立リハビリテーション中央病院「子どもの睡眠と発達医療センター」副センター長等を経て、2018年より現職。

学会活動として、国際DCD研究・支援学会(ISRA-DCD)日本代表委員、日本発達神経科学会理事、日本子ども学会理事、日本赤ちゃん学会評議員、日本小児神経学会評議員、日本小児精神神経学会代議員、社会活動としてNPO法人AOZORA福井、一般社団法人 笑壺研(ETUBOLAB)各理事を務める。また、日本DCD学会を設立、その理事を務め、大会長として2017年第1回学術集会を開催。

DCDに関する主な著書に

『発達障害児支援とアセスメントのガイドライン』(2014金子書房)

『子どものリハビリテーション医学第3版-発達支援と療育-』(2017医学書院)『発達性協調運動障害-不器用さのある子どもの理解と支援-』(2019金子書房)『発達性協調運動障害(DCD)の理解と支援』(2019丸善出版:監修、最優秀作品賞(文部科学大臣賞)受賞)

『発達障害のある子の感覚・運動への支援』(2022 金子書房)

『イラストでわかるDCDの子どものサポートガイド~不器用さのある子の「できた」が増える134のヒントと45の知識~』(2022合同出版)など多数。

(5) 森川芳彦先生(川崎リハビリテーション学院准教授)

認定作業療法士、岡山県作業療法士会理事、日本感覚統合学会インストラクター。

2000年より現在まで、当学院に作業療法学科の教員として勤務。専門は発達障がい領域の作業療法。川崎医科大学附属病院リハビリテーションセンターにも作業療法士として勤務しており、幼児期から学童期の発達障がいの子どもの作業療法をしている。岡山県作業療法士会では、子ども地域支援委員会の委員長として、地域に作業療法士を派遣する事業に携わっている。著書は『学童期の作業療法入門』(2017クリエイツかもがわ)、『学童期の感覚統合遊び』(2019クリエイツかもがわ)。